



馬耳東風

かつて白ロシアと言ひ巨大国家ロシアに隣接する小国、ソ連邦が解体し今はベラルーシと呼ぶ。南はウクライナ、北はバルト3国のラトビアとリトアニアに、西はポーランドに接する。あのウクライナのチェルノブイリは国境を隔てた至近距離だ。1986年爆発が起こり、原発第4号炉の原子炉と建屋が崩壊、科学技術がもたらした20世紀最大の事故となり世界中を揺るがした。1,000万人口の2割以上が汚染地域に住む。その人々の声を丹念な取材で聞き取った、アレクシエービッチ (Alexievich) の「チェルノブイリの祈り」(岩波書店, 2015) は人類の未来に語りかける。ジャーナリストらしく民の視点に立って、この時代における苦難と勇気の記念碑とも言える多声的な叙述にノーベル文学賞が贈られ世界が注目した。それは政治と科学に翻弄^{ほんろう}される人々の生き方に焦点を当てている。印象的なのは政治的秘密主義で、体制のご都合主義があまりにもひどい。健康被害が続発して人口が減り続けている。かつてのファシズム侵攻では帰郷できたが、移住を強制されたことで、残れば高度の放射線被曝を受けながら暮らすことになる。兵士や除染労働者に向けられる勲章と引き換えの過酷な労働条件が思いやられる。大気中に放出されたガス揮発性物質は全世界に広がった。長期にわたる低線量放射線の影響の結果、がん疾患、知的障害、神経・精神障害、遺伝的突然変異を持つ患者数が増えているとしている。立ち入り禁止の放射線生態学保護区ではオオカミ、バイソンなど野

生生物が増えている。「石棺」と呼ばれる4号炉の鉛と鉄筋コンクリートの内部には、核燃料が残り廃炉のめどが立たないまま30年が経ち森にのみ込まれ、最近シェルターが造られたが廃炉へと向かうのだろうか。読み進むうちに息が苦しくなってくる。

広島・長崎は戦争という条件下であり、福竜丸の死の灰は核実験であり、チェルノブイリは原子力平和利用の事故である。25年後の福島原発事故は大震災に伴ったものだが、いずれも人の手によって科学の名の下に作り出され人類に徹底的なダメージを与えた。メディアの情報は一面的だ。そんな折、ノンフィクション作家・眞並恭介の「牛と土」(集英社, 2015)に出会った。臨床獣医師の突発的な事故に伴う描写は、作家の力量十分である。思わず表現に自分の身体の動きを重ねてみる。警戒区域には被曝した動物が今も生きている。処分を潜り抜け、解放されたが行き場の無い彼らにいかに対処するか。牛飼いの命あるものを見殺しに出来ない攻防が渦巻く。野生狂暴化した家畜の処分に真剣に取り組む行政獣医師の姿勢に頭が下がる。やがて、研究対象としての存在価値や研究成果も見られるようになった。人の手の入らない荒れ果てた農地の草を食いあさり、農地への復元可能な保全価値を持つことが分かってきた。原発事故という共通項を掘り下げた力量が示された。除染が進み「帰ってきたよ」と全村避難が続く飯舘村の成人式が、解除に動く原点の郷土で、晴れやかに開かれたニュースに心の復興を見た思いだ。今春の解除は4町村3.2万人だという。(柏)